

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ35】

詐欺,横領,脱税の容疑ってマジ、デッチ上げなの!?

「今や捜査の狙いは・・・賛助団体の不動産物件や資金の流れに焦点が当てられ、脱税、横領などありもしない宣伝を行い・・・」「いまや弾圧は、前顧問の組合財産の私物化、横領・脱税に焦点を当て・・・」などと、およそ労働組合運動とは無縁の詐欺、横領、脱税等の反社会的言辞がれっきとした本部機関紙や某地方本部委員長挨拶として活字が踊っている。これって社会的、労働組合的にも品格に欠けるぞ!

要するに前顧問松崎明が「デッチ上げ、不当」な詐欺、横領、脱税の容疑で警察から追われているのだという。だからあってはならないことだが、仮に、逮捕でもされたら「不当弾圧! デッチ上げだ! 組織の総力をあげて闘おう!」となるだろう。

エー・ジョーダンじゃネーヨ 組織がぶっ壊れるぞ!

ハッキリしていることは、労働組合運動にとって「詐欺や横領、脱税」などは、まさに無縁であるばかりでなく、組合員に対する裏切りそのものだろうよ。でもな、本部は「脱税、横領などありもしない宣伝」と言っているのだから、逮捕など絶対ないはずなのだが。

ところがここに来て、本部はあたかも前顧問が今すぐ逮捕でもされるような危機感を煽っている。 察するに「いかなる事態に遭遇しても驚くな」と組合員を鍛えている気なのかもしれない。

ふざけんじゃねーよ! 勝手に「鍛えられる」組合員はたまったものではないっしょ!?

ただこれだけが心配。「賛助団体の不動産物件や資金の流れに焦点が当てられ」とあるけど、本部が言っている事とは関係がないのかな? 私にはわからないけど。

ところで、どうでしょう前顧問、ここまできたのだから自ら積極的に組合員の前で疑念を晴らしたらどうですか? そんな屈辱的な嫌疑をかけられて黙っている手はないっしょ! 前顧問が晩節を汚すなど私は考えたくもないですよ!

しかしそうしなければ、私は前顧問に説明を求めますよ! 本当に詐欺、横領、脱税は権力のデッチ上げなのですか?

組合運動とは無関係のこのような事は、説明していただかないと仮に「最悪」の事態になったとき、いくら「鍛えた」気でいられても、反撃する私のバネにはならないのです。労働組合運動とはそういうものではないでしょうか。

何でもかんでも"不当弾圧"として組合員を煽り、そそのかすこととはチョット違うのではないですか。

「私生活面においても、労組リーダーたる者はエリをただせ」と教えてくれたその人の名は松崎明・・・

2004/04/15 P・N 教えに忠実な組合員

民主化の声・声・声・・・

2006. 1. 13 その35

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (15止)

～佐藤正雄氏失踪事件と、さつき会経理偽装問題～



* 「これじゃあ、まるで社会保険庁のやり方と同じだ」「グリーンピアなど年金関連施設のデタラメな建設と運営と処理のことだな」「そういえば椿商事もそうだ。資金が椿会のものかは判らないが、大元がオーナーとなり息子を社長にして破綻させた。その責任をウヤムヤにして一切を椿会や協会や鉄道友愛会社にツケを回して一件落着させる」「協会や鉄道友愛会社だって、元はわれわれ組合員の拠出でできたものだろう」「今度は協会や鉄道友愛会社を新たな私腹のターゲットにする気が。結局は大元に振り回されているってことだ」「大元の実績とあの弁舌に惑わされてきたんだよな。彼を評価する基準は、言行が一致しているかどうかで見なければと、今度のことでしみじみ思うよ」「組織のため、労働運動強化のためと称し、組合員の拠出でつくった協会や椿会の資産を、私利私欲のために勝手に使い込んで恥じない労働運動のリーダー。それが悲しくも現在の大元の隠された顔のひとつか」「俺たちの前で、組織の金をあたかもポケットマネーからの奢りであるかのように、気前のいい振る舞いをやっていたのは、悪事を隠蔽するための口封じの意味だったのか。もっとも大元は株運用と著書の印税から得た金だと常々言っていたがね」大元の著書の購入は組織に割り当てられていた。割り当てが消化されるか否かが大元への忠誠度の尺度とされた。「悪事が露見されたときに、『私用に使ったのではない。組織の強化と運動に限定して使っている』なんて言い出すかも知れんな。例えば、ポーランドやアフガンの運動資金に使っているとかと...」「これらの不正にも、組織内部の自浄作用は全くなくなっている。情けない」「そうだよな。アメリカの大エネルギー企業のエンロンでは、解雇される決意で女性幹部が不正を告発したが、日本最良の労働組合と言われる鉄道連合は、エンロン以下ということになる」自分たちが、今、何をしなければならないかが明らかになったと思っていた。「このままで済ますわけにはいかない。まずはオレ達自身が勇気を出さないと、一生悩み続けるかも知れない...」「どうだ。そこの食堂で、キュッと一杯やっていかないか」誰かが言ったが、応ずる者はいなかった。(p. 169～171)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【「そういえばさつき企画もそうだ。資金がさつき会のものかは判らないが、松崎がオーナーとなり息子を社長にして破綻させた。その責任をウヤムヤにして一切をさつき会や協会や鉄道ファミリー会社にツケを回して一件落着させる」「俺たちの前で、組織の金をあたかもポケットマネーからの奢りであるかのように、気前のいい振る舞いをやっていたのは、悪事を隠蔽するための口封じの意味だったのか】

小説があまりにもリアルなので解説の必要もない。ただただあきれるばかりである。このような J R 総連・東労組に未来があるはずがない。

民主化の声・声・声・・・ (続く)